みんぱく若手研究者奨励セミナー　報告要旨　　松村　直樹

開発援助における「安全な水」概念をめぐって
～バングラデシュ砒素汚染対策支援の事例から～

本報告では、バングラデシュで新たな生活の脅威として立ち現れている地下水の砒素汚染問題とその対策実践を事例に、開発援助における水と衛生分野において目指される「安全な水」とは一体何かについて開発の人類学の視点から論じたい。

バングラデシュでは、1993 年以来飲用地下水に自然由来の砒素が含まれているという問題が住民の生活を脅かしている。かつて池や川の水を飲んでいた住民の生活は、水に由来する疾病防止のため、多くの開発援助機関や政府の努力によって、60 年代から徐々に地下水を飲用する生活へと切り替えられた。国家を挙げた取り組みの結果として 90 年代にはおよそ 95%の農村地域に「安全な水」が供給されるまでになり、この分野における成功物語の一つとして語られてきた。しかし、この成功物語は 1993 年、バングラデシュ北西部で発見された地下水の砒素汚染問題へと帰結し、「安全な水」は人々の手から再び零れ落ちることになる。

これまでに世界銀行の支援を中心に実施された全国調査を通じて、64 県中 61 県、全国に設置された井戸の約 3 割に砒素汚染が見られることが明らかになっている。砒素曝露のリスク下にある住民は全国で 3500 万人にも上ると試算されており、また既に約 4 万人の砒素中毒患者が確認されている。ただ問題発生から 15 年余りが経過した現在においても、地下水依存の生活を脱却するだけの十分な代用水源は見つかっておらず、解決に向かっているとは言い難いのが現状である。一方で地下水の利用という新しい習慣と共に作りあげられてきた「安全な水」観も、その問い直しが求められる段階にあるといえる。

本報告では「安全な水」とは一体何なのかという問いを主題に据え、砒素という新しい生活リスクが特定され可視化されながら、安全への不可視性が増すという逆説的な状況の中で新しい知の生成過程とそれらが入れ替わっていく過程を、開発の人類学という観点から、報告者自らが携わってきた砒素汚染対策プロジェクトを事例に論じたい。

より具体的には、１）「安全な水」が対策側によってどのように示されているのか、そして２）住民レベルでは「安全な水」がどのように捉えられているのか、の 2 点について多所的な現場の事例から考察する。

まず１）では、砒素汚染対策実践の場において「安全な水」観をめぐって住民とプロジェクトとの間にどのような齟齬が生じているのかを、報告者が直接関与したプロジェクト現場の事例を元に明らかにすることを試みる。そして「安全な水」供給をめざして行われる対策の多くが対象社会の特性に関わらず既にパッケージ化した形で導入されるために、「安全」への呼びかけに住民が十分応えることが出来ない構図が埋め込まれており、それが対策における両者の齟齬を生みだしていることを論じる。

そして２）では主に当事者のリスク認識に焦点を当て、砒素汚染村の住民や村医らの語りや態度の分析を通じて、住民の日常生活にとっての砒素汚染問題とは何かについて明らかにすることを試みる。特に、外部からリスク認識や対処法が持ち込まれたという経緯から、当事者にとって砒素汚染が生活上のリアリティを伴ったリスクとして布置されていない状況にあることを明らかにする。その一方で、新しく社会に取り込まれ使われ始めた「アーセニック（砒素）」という単語自体が、その毒性やリスクとは別の文脈で非知な事象に対する当事者の生活上の経験、信念、時間概念などが投影されて様々な形での使われ方がなされていることを明らかにし、それらを紡ぎ出す試みが問題解決を図る支援側との認識のギャップを埋める上で重要であることを論じる。

最後に１）、２）での分析を通じて、開発援助において目指される「安全な水」が、結果として達成される「何か」ではなく、フォーマットの繰り返しと様々なパッケージの組み合わせを元に次々と看板を架け替えて掲げられ続ける終わりの無いスローガンであることを論じる。また同時に、そこには未来からの「引き算」によって現在の位置取りを設定する開発援助側と、現在の積み重ねの先に未来を置きそこを「不可知」の領域と捉える住民側との決定的な時間概念の違いが存在することを論じる。その差異が、双方によって生み出される実践の現場で、宿命論⇔理想論、予防的発想⇔現実的対処、問題解決至上主義的対処⇔問題先送り的対処といった、双方が双方の非にもたれかかるようなすれ違いの構造を再生産していることを明らかにする。そして「安全な水」を語るとき、その拘束からいかにして逃れることが可能かについて考察する。

（以上）